

五代友厚のシンポジウムの感想

法文学部人文学科2年 末岡 隼

「五代友厚と〈鹿児島近代〉」のシンポジウムは、これまで、政商としてあまり良い印象を持たれていなかった五代友厚について、視点を変えて考え直す試みでした。五代友厚はこれまで、政商、開拓使官有物払下事件など、歴史教科書などでは悪い印象かつ低い評価で書かれることが多い存在でしたが、今回のシンポジウムでは五代友厚の「英雄」としての側面を見出す講演やトークがたくさん行われました。また、比較として渋沢栄一の功績と五代の友厚の功績と比較して五代の功績がより鮮明化する試みも行われました。

このシンポジウムに参加して思ったことが二つあります。一つ目は、五代友厚はやはりこれまで言われてきたような悪い人、政商という言葉が持つ「政府とつながりのあるずるい人」とイメージの人ではないという事です。今回のシンポジウムでは、五代友厚の人柄や考え方がうかがえる史料がいくつか紹介されました。それを見ると五代友厚も、明治維新に名を連ねる薩摩の英雄と変わらない、日本の発展を願って行動した人だったことがよくわかりました。二つ目は、歴史の人物の評価は困難かつ一度世間で定着したイメージを払しょくするのは難しいという事です。歴史上の人物の評価や世間でイメージは、その人物が残した功績や人柄で決まると思います。しかし残念ながら本来評価されるべき人物が言葉のイメージや、何か一つの悪い出来事が広まることで世間での評価やイメージが悪くなってしまうことがあります。その典型例が五代友厚といえるでしょう。今回のシンポジウムに参加して、これまでの五代が正當に評価されていないことを嘆く専門家の先生のお話を聞き、一人の人物の評価を変

えるのは難しいことなのだと実感しました。難しいかもしれませんが、今回紹介された映画「天外者」、などのメディアコンテンツ、そしてこのようなシンポジウムをコツコツと積み重ねることが評価されるべき人物に正當な評価を与えることにつながると思えました。

日本のために動き、功績を残した人物が正當な評価を受けないことは、明治日本を検証する上で障害になるだけでなく、これからの日本を考えるときに過去の偉人から得られるヒントを見落としてしまうかもしれません。今回のシンポジウムは見落としていたものを拾い上げる貴重な機会といえると思えました。

